
旋律を聴け、韻律に舞を

イノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旋律を聴け、韻律に舞を

【Nコード】

N3391T

【作者名】

イノル

【あらすじ】

その世界は神によって支配されていた。文字の存在しない国に彼は居た。文字のかわりに、旋律があり、舞がある。そんな国。力を失った獣の神イシュノバと共に旅するノズ。イシュノバの力を取り戻すために旅を続ける。神とは何かを知る為に。

1 旋律を聴け、韻律に舞を（前書き）

<登場人物説明>

ノズ……………黒髪、黒い瞳の人間たちの中で紅い髪で生まれた青年。そのため幼い頃から迫害され、追放されたときに、獣の神と出会う。（当時十歳）

以来一緒に行動している。現在十七歳。槍の使い手として成長。

イシュノバ…獣の神。砂獅子のような姿形だが、鎧を身にまとうっており、人間の言葉を話す。記憶を失って彷徨っていたところでノズと出会う。記憶を取り戻す旅をノズと二人でしていた。

シャーラ…………盗賊に連れられていた巫女。神の見捨てた地「ノア」の少女。十二歳。イシュノバとノズに助けられ、共に旅をしたいと申し出る。

アーシエ…………植物の神。かつての人間の神と二大神と言われていた。人間の世界に落とされ、ノアの地で四つの力に別れ息を潜めていた。シャーラにとつての護り神であり、現在はイシュノバ達と旅をするため、力を取り戻すためにシャーラの身体を依り代にしている。

シュウエイ…ノズの師であり、イシュノバの友人。世界の中心の都市、ランレイ蘭麗に住み二人に援助をしている。七十四歳の元格闘家。

ウイリア…………ノズの姉であり、彼にとって唯一の理解者。十年前に贖にされかけたノズを助け逃がした。二十歳の黒髪の女性。

ヒュマノズ…人間の神。神話では人間の神と植物の神の戦いで勝利し、植物の神やそれを味方した神々を追放したとされている。実際は人柱的に神界を守る神である。

ライニ…雷の神。現在は依り代がないために雷獣の姿をしている。

ファバ…火の神

アウラ…水の神

ヒューマ…風の神

グーデイ…人間の負の力によって生まれた「神のなりそこない」何かを求め、ノズたちを狙う。

1 旋律を聴け、韻律に舞を

幾つもの松明に火が点っている。此処は砂と岩に囲まれた舞台。一人の女性が煌びやかな衣装で舞い、踊り、老年の男性が太鼓でリズムを刻む。そのリズムは一定なテンポを取るかと思いきや、時に激しく溢れる旋律を加える。二十代であろう女性がそれに合わせながらも、まるで祈るような振る舞いをみせる。

そう、これは物語なのだ。舞は物語を語っている。

その舞は四十八番目のうち、十二番 ヒュマノズ神を崇める舞。舞台の周りには、十数人の人々が舞を見つめていた。それこそ、老若男女、幼い赤子まで。

岩に腰をかけたり、地面に座り込んだりと食い入るように舞を見つめる。

その中に奇妙な男が一人混じっていた。正確には一人の男と大きな獣。

男は十代後半か二十代前半とも思われる。紅い燃えるような髪を後頭部で髪飾りにあわせくくり付け、長い髪をまとめている。それには隻褐色の瞳。何か武芸を嗜むのであるう、立派な体格をしていた。長身で、瘦身でありつつ、だが立派な胸板が、彼の武芸が遊びではない事を物語っている。

その証拠に、足元には長い槍が無造作に置いてあった。その槍は見事な装飾に覆われ、今は崇められる事のない、アーシエ神や様々な神々が刻み込まれていた。その槍をすぐ手元に置きながら、青年は座り込み、背もたれに巨大な獣を扱っている。

青年はこの地域独特の武芸者が身に付ける衣類を身に纏っている

がらも、どこか遠方の血を感じさせた。紅い髪はこの地域の黒色の髪とは確実に異質なものだからだ。

そして、その彼が背もたれとして扱っている獣も尋常ではなかった。一見すると、この国の奥の奥に生息している砂獅子に似かよっている。だが通常砂獅子は茶薄色の毛並みを持っているものなのだが、その獣は見事なくらい純白で、まるで真珠のような美しい毛色をしていた。その獅子に合わせて造られている装飾品。いや武器といっても良いのだろう。それを身に纏っている。

それに砂獅子は決して人に馴れる事はない。こうやって背を貸しているというのは、よほど、この人物に心を許しているのか。

舞を見ている人々は、ちらりちらりとその青年に視線を向ける。だが、青年は一向に気にする様子はない。この外見に、この獣ならば、もう慣れているのかもしれない。獣のほうも、まるで舞いが判るかというように、視線を巫女の方に向けている。

やがて、舞は最後の祈りと共に終わりを迎える。太鼓のリズムも静かに、夜空へと吸い込まれていった。

人々は、拍手と共に方々へと散ってゆく。

此処は采紗サイシャという街。そして、その中心部の広場。この祈りの舞の後、人々は食事を取るなり、眠りにはいるために家に入るなり、それぞれの場所に向かっていく。

やがて、広場には誰も居なくなる。その青年と獣を残して。

「どう、だったか？ 見つけたか？ イシユノバ」

青年が誰かに問うように口を開く。そこには誰も居ないというのに。

だが、返事をしたのは、人語を話すことのないはずの獅子だった。「ふん、あれはただの舞に沿った語り。ワシの記憶の足しにもならんわ」

ため息とともに取れる呼吸を一つして、顔を手足の間に埋める。

「ワシの記憶の韻律はなかった」

そうか、と言って青年、ノズは立ち上がる。そして槍を背に担ぐ。
「こんな南部の大きな街に、そうそう有るわけないか」

この世界には文字というものが存在しない。勿論本も無い。此処にあるのは口伝と、舞と韻律だけなのだ。

舞は四十八の物語がある。それは全て神々の物語。うち二十五の舞は巫女 集落には必ず一人は存在する言わば神の代理のような存在。 が全て記憶している。残り二十三の舞は秘伝とされ、知っているものは数が限られている。

一方リズムはリズムで様々な韻律や旋律で様々な物語を語る。一小節で一つの言語なのだ。その気になれば、舞の物語と別にリズムで別の物語を語ることもできる。だが、それはよほど熟練した巫女と、太鼓でなければならぬ。…そんな人物は存在するのか、いまだやってのけた人物は居ないとされているが。

ノズは小さな宿屋に立ち寄った。イシュノバは首に革の紐をかけられている。

「こんなモノをつけるのは屈辱じゃ」

とは言うものの、これをしなければ、ノズの所有物と認識されずに、大騒ぎになるので仕方なくイシュノバは、毎回しぶしぶに首に革の紐を掛ける。

正確にはイシュノバはノズの所有物ではない。

立派な個である。人格を有し、人語を喋る。 ただ、記憶が無い。

い。どうして自分は人語を喋れるのか、どうしてこの姿をしているのか。

此処の街に来るまでに、色々な場所を旅してきた二人は、ある程度イシュノバの記憶を取り戻している。

まず、自分は普通の獣ではなく、神の獣とされる生き物というこ

と。

ある理由から、神界から落ちてきたこと。
神界で、戦争があったこと。

だが、それと自分に何の関係があるというのか？

記憶は戻っていない。

記憶を戻す旅を二人は続けている。

イシュノバにとって記憶とは、リズムであり、韻律であり、旋律でもある。不思議なリズムを刻む人間がいれば、それはイシュノバの記憶の一部であり、力の一部でもある。

その人間は記憶に関する力を有していることになる。世界の散り散りに散ってしまった記憶と力。そして、それを有する人間。それを捜している。

ノズは通常の料金の倍を払って、宿をとった。獣を部屋に入れるのは、本当は宿屋の人間にとっては嬉しくない。だが、外で暴れられても困るということで、中に入れてもらったのだ。

さすがに大きな獣を入れるということで、広めの部屋を借りれた。ノズは槍をベットの脇に立てかけ、一息ついた。

「久しぶりの宿だな。先に風呂に入る。ここ数日の旅で砂埃まみれだ」

そして、早速風呂へと入る。

イシュノバは、綺麗に配置してある、机や椅子を退け、自分のスペースを作る。

長い美しい毛がよく見ると砂埃にまみれていた。ワシも入るとするかな。と思い、勝手に風呂場の扉を開く。

「ついでだ。一緒に洗ってくれ」

全裸のノズに体を預ける。ノズは最初驚いた表情を浮かべたが、

濡れた紅い髪を掻き揚げると、丁寧に湯船から桶で湯をかけた。

2 旋律を聴け、韻律に舞を

遠い昔の物語。

神々は神界に二つの勢力があつた。

人を造り人間に意思や思考を与えた 女神 ヒュマノズ神

植物を造り、世界に息吹を与えた 女神 アーシエ神

その二大神のもと、数多の神が存在した。

水の神、風の神、獣の神、昆虫の神、それこそ、石の神やら草の神まで。

まさに八百万の神々がこの地上を見守っていた。

だが、神界は勢力争いをはじめた。

ヒュマノズ神を中心とする人間、動物、生物の神々と、アーシエ神を中心とする、植物、草、風の神々に分裂をする。

アーシエ神は、もつと植物に力を、風に嵐を、水に命をと、力を求めたのだ。

人間が支配する世界など、存在させてはならない。とその神をも否定する。

激しい戦いが繰り広げられた。

その戦いは八百年続いたと言われる。

戦いに勝利したのはヒュマノズ神だつた。

その勝利に人間は喜び、歡喜した。そして繁栄が許される。

かの女神に味方したものは、繁栄を。

そして、敗れたアーシエ神は、地に落とされた。

醜く地を這いずり回る存在に。

かの女神に味方したものには、衰退を。

世界は、変わる。

風は力を失い、草木は岩肌荒い大地にすがるように育ち、水は地の奥深く眠りにつく。

< 伝承の舞による物語より >

この物語で、この世界がわかるだろうか？

世界の大半は岩と砂に覆われ、細々と育つ植物。雨はほとんど降らず、大地の下を流れる水を汲み上げる。

神々の戦いは、決して人間を豊かにする戦いではなかった。

だが、人々はヒュマノズ神を崇め奉る。

人間が此処まで繁栄したのはヒュマノズ神のおかげだと

太鼓の音でノズは目を覚ました。

今の音は朝の七時をさしていた。久し振りの宿で安心して眠ってしまったらしい。

ノズは余り眠りの深いほうでは無いのだが、疲れがでていたようだ。

「良く眠っていたようだな。いい傾向だ」

床に毛布を敷いて、ゆったりと身体を伸ばしていたイシユノバが言った。

ふん、とノズはベットから立ち上がる。そして、手荷物として持っていた革袋から小麦を練って焼いた物と、水を取り出し、口に放り込む。

さらに革を薄く伸ばした紙の代わりに使っている、地図を机の上

に広げる。

「現在は、南部の街、采紗だ。ここから南へ行くと、数個の集落がある。一番近いのは論樹ロシユの村だな。…今日は此処を目指すか」
地図にはこの国の大まかな図面が載っていた。もちろん文字というものがこの世界には存在しないので、墨で描かれた山や谷、そして、黒く丸を付けられているのが、集落ということになっている。「うむ。最近この周辺で夜盗が出没しているという点も気になるし」

イシュノバの記憶には力がある。影響力があるというほうが近いのかもしれない。その近辺で悪しき韻律があれば、その地は、悪い地脈が流れてしまう。

現に、今まで回収してきた韻律のなかには、「悪行」などの意味が含まれているものがあつた。イシュノバが回収すれば、影響力が無くなるが、それまでのその地では、残忍な首領が居て、その韻律の通り悪行の数々を行っていた。

ノズはイシュノバの許可がおりたというように、早々と出かける準備をはじめ。イシュノバも干し肉を噛み締め、朝食を済ませる。二人は宿から出た。

太陽はまだ東の大地に昇り始めたばかりだ。朝日が街に差し込む。ノズは街並みを見渡した。朱で染められている建物の街並み。この国の建築様式を見事に組み合わせさせて、美しい光景を見せている。街の中央部に演舞台、そして西に東にと延びる。ここは旅人が多くくるらしいので、商店などが道の左右に広がっている。

二人がこの街に入ったのは、夜の舞の時間だったので、こんな美しい街だとは気付かなかつた。

「さあ、行こうか」

人通りがまだ少ないこの時間。イシュノバの首紐を外して、二人は門から外に出た。

岩山を歩いている。

そんなに急勾配ではないが、山岳地帯特有の植物が心もとなく生えている。

途中、驢馬に乗った物売りに出会った。采紗に売り物を運んでいるのだろう。ついでに食糧三日分を購入し、論樹ロシユへの道を聞いた。

「ああ、論樹ね。…行かんほうがええと思うよ。二週間ほど前、夜盗に襲われてな。なんにも残されてないって話やわ」

二人は顔を合わせた。恐れていた出来事が起こったらしい。

「しかも、丁度、夜盗向きだったんやろね。ねぐらにされているっていう噂まであるねんで」

物売りが拝む真似をした。

「せめてヒュマノズ神の下に無事に行けたらええな」

「そうだな」

そう言い合って、物売りと別れた。

ノズは考える。夜盗に襲われ、さらにねぐらにまでされている論樹。これは何かあるような気がする。夜盗に合う波長の力が眠っているのかもしれない。

「どう思う？」

イシユノバの方に視線を向けた。

「ともあれ、そこに人がいるということは、太鼓も眠っているかもしらぬ。太鼓すらあれば何かしら手がかりがあるかもしれぬしな」

二人は意見が一致すると、また、足を動かした。

血の匂いが、イシユノバの鼻についた。論樹の集落が近づいているのがわかった。

ノズは槍を背から外すと、槍の先端の保護袋は外さずに、手に握り締められた。

集落の入口に見張りの人間が目鋭く、睨みをきかせる。

「何か、用か」

「お前達は、夜盗か？」

燃えるような紅い髪の毛の男が一言、口を開いた。

「だから、何だって？ お前も身ぐるみ剥がしてそこらの岩山へ捨ててやるよ。その獣の毛皮も高値で売れそうだ」

イシュノバが男の首筋に噛み付いた。男の醜い声が漏れる。

それを合図かというように、ノズは集落の中へと滑り込むように入り込んだ。

集落の夜盗たちは一斉に色めきたつ。

ノズはもしや、夜盗以外の人間が囚われているのではないかと思ってみたが、その心配はなさそうだ。槍の先端の保護袋を外す。

槍が美しく弧を描いて舞った。突然の襲撃で、夜盗達は混乱を極める。だが、敵だと認識すると、各々武器を用いてノズに襲い掛かった。

それを薙ぎ払い、かわし、激しく繰り出す。そして槍を弓なりに反らしたかと思うと、弾くように叩く。

みごとな武術だった。まるで演舞のようだ。さらに槍の柄の部分を地面に突き刺すと、自らその槍を中心に円を描きながら夜盗を蹴り倒していく。

あつという間に二十人近くいた夜盗どもは倒された。

「相変わらず見事だな」

のんびりとイシュノバが入口から入ってきた。首周りには見張りの血がべつとりとついていて、それが不快そうだった。別にイシュノバは人間を喰ったりはしない。不意をついて首に噛み付いただけだった。

夜盗はほぼ仕留めた。息のあるものは、這いずりながら逃げている。少なくとも重傷を負わせている。もう、人を襲うことは出来なだろう。

ノズはイシュノバの姿を見ると、持っていた水筒で首周りを綺麗に洗った。ここが夜盗の溜まり場だったのならば、井戸は枯れてい

ないと見たからだ。

「ふう。汚らしい姿になってしまった。全く、普通の獣のフリもつらいな。…さて、太鼓は此処にあると思うか？」

ノズは周りの風景を見渡す。ボロボロになった建物達、荒れた集落。太鼓は残っているのだろうか。

とその時。

シャリン、と鈴の音が朽ち果てた建物の奥から微かに響いた。

ノズは無言でその建物に近づく。

そこには、幼い巫女の姿がそこにあつた。

考えれば当然の話ではある。夜盗といえど、この世界の住人なのだ。信仰が根付いているこの土地では、どれだけ悪い人間でも巫女を連れていてもおかしくないのだ。ただ、この巫女はそんなに盗賊の気配はしない。汚れている風でもない、むしろ、強制的に無理やり連れて来られた可能性が高い。

ノズは巫女の足元に跪いた。少女は恐れおののいて動く事すら出来ない。出来るだけノズは優しい声を出すように頑張った。いつもはぶつきらぼうの彼だから。

「大丈夫だ。おまえを襲うようなことはしない　おまえは此処の住人なのか？」

巫女、おそらく十二、三才ほどの少女は、体を震わせながらも首を横に振る。

「……じゃあ、ここの連中に連れ去られてきたと言う事か？」

今度の質問に、こくと頷く。なるほど、此処が襲われる前のこの地の巫女はどうなったかは考えたくも無いが、彼女はどこかしらか連れ去れて来たらしい。

彼女はカタカタと音がなるくらい震えている。よほどさっきの戦いが怖かったのだろう。

そんな女の子を胸に抱き寄せる。

「こうすれば、安心するって聞いたんだが……」

幼い少女を扱ったことの無いノズは戸惑っている。もともと、普通の人間にすら関心を持たない彼だから、行動は微妙なものになっている。

ため息と共に、イシュノバがやってきた。

「だらしのない奴め。彼女をワシに渡せ」

イシュノバは少女に擦り寄った。そして頬を舐める。イシュノバは普通の獅子よりも大きいので彼女をすっぽりと包んでしまう。その温かさや、綺麗な真珠のような毛で覆われて少女はすっかり落ち着きを取り戻してしまった。

イシュノバが腰を落とすと共に、少女も身を寄せて腰を落とす。

「……まいったな……」

頭を掻きながら、ノズはため息をついた。歳の功なのか、なんなのかわからないが、すっかりノズは自分の役目を失ってしまった。

「……じゃあ、この土地の者ではないんだな」

こくと再び少女は頷いた。なにか喋ろうとしているが、声にならないようだ。

「もしかして……声が出ないのか？」

ノズが目を見開いて少女に問い掛けた。彼女は何度か声を出そうと頑張ってみたが……声にならない。一過性ではあるようだが……。

「じゃあ、自分の名前を口の動きで教えてくれ」

少女はゆっくりと、口を動かす。：サ、シャ？

「サシャ？」

彼女は首を振る。そしてもう一度口を動かす。

「シャーラ、シャーラか？」

何度も少女は頷いた。そして笑顔をみせた。朝顔のような、爽や

かな笑顔になった。

きつと、この生活で名前を呼ばれていなかったのだろう。とても嬉しそうにノズの頬に触れた。

「シャーラ、おまえ、ここの夜盗の奴らに何かされたか？」

ノズは少し心配していた。夜盗どもがこの少女に手をつけていたらと思うと、あれくらいに仕打ちではすまさないつもりだった。だが、少女は首を横に振った。そして、集落の中央にある、演舞台、あれを差す。

どうやら、少女は巫女としてのみ連れ去られてきたようだ。巫女を汚すようなことは禁じられている。ノズは安心する。

シャーラは立ち上がり、ノズの手を取り、イシュノバを招き寄せ演舞台に招き寄せる。そして、中央に無造作に置かれていた太鼓をとり、ノズに渡す。

「舞いたい、のか」

ノズは槍を演舞台横に置き、演舞台脇に座る。足の間に太鼓を挟み、ポーンと鳴らしてみた。

それは予想外な音だった。放置されていたとは思えない透明感のある音だったからだ。

そして、太鼓は叩き手を招き寄せる。

ノズが叩いているのではない。太鼓がノズを動かしているのだ。

そして、シャーラは舞はじめる。まるで女仙が舞い降りたみたい

に。

「おお……」
イシュノバが声をあげた。そして目を閉じ、その旋律、韻律に聞き入る。

「これぞ、我が記憶……「乱」の韻律……」
イシュノバも演舞台に上がる。そしてシャーラと一緒に舞い始める。

その旋律は、荒々しく、だが、悲しみも含むリズムだった。シャーラン、シャーラン、シャーラの手首、足首に付いている鈴が鳴る。

同じようにイシュノバの真珠の毛も鳴っているようにも見える。ノズもそのリズムに、舞に見入りながらも、手を止める事はない。自分の記憶にないリズムが太鼓の手によって紡がれている。

もう、夕闇になり始めた空に吸い込まれていった。

やがて、舞は終わった。

静かに、悲しみを残して。

この地に流れていた「乱」の地脈が静かに消えていく。

「思い出した。ワシはヒュマノズによって、この地に落とされたのだ……」

3 旋律を聴け、韻律に舞を

本来、獣の神である、イシユノバ。だが、戦いの後、味方であるはずのヒュマノズ神に地に落とされた。それは一体どういうことなのだろうか。

夜も暗くなり、なんとか家の原型を留めている跡に、寝ることに決めた。

獣の皮を敷き、落ちていた古木を燃やしている。朝に商人から買った食料を温め、口に含む。ノズは外が見張りやすい柱に背を預ける。イシユノバも丸くなってシャーラを包んでいた。

シャーラはいたくイシユノバを気に入ったようだ。顔を撫でたり、擦り寄ったりしている。

「彼女のおかげで、記憶が一つ戻ったの」
シャーラの撫でる手が心地よいのか、イシユノバはうつらうつらしかけている。

「シャーラを連れて、一旦采紗の街に戻らないといけないな。立派な巫女だ。長も悪い目には合わさないだろう」

ノズはシャーラを街の住人に預けるつもりだ。さらわれた少女を一人匿うくらいならば、あの街の長ならば受け入れてくれるだろう。だが、それを察したシャーラは首を横に振った。そしてノズに駆け寄る。必死に衣類を引っ張って放さない。

「一緒に行きたいのか？」
ノズがそういうと、嬉しそうに頷く。

「だが、危険な旅を俺たちはしているのだ。おまえまで巻き込まれてしまう……」

そう言うと彼女は涙目になった。少女とはいえ、女の子を泣かすのは気が引ける。

「しかし、喉を治さないと……。喋れないままじゃおまえも不便だろ？ 采紗なら良い医者もいるだろうし」

困った顔のノズが説得をする。しかし彼女は首を縦に振らない。

「良いんじゃないか？ ワシとお主なら、彼女一人くらい守れるだろう」

のん気にイシュノバは彼女を同行させることを許可する。だが、とノズは声を上げて抵抗をする。

「じゃあ、喉が治れば良いのじゃろ？」

そう言つと、イシュノバは自分の身体をゆっくり持ち上げた。そして深呼吸をする。

何を……。そう言おうとした。シャーラも不思議そうにイシュノバを見る。

神経を集中したかと思うと、イシュノバはシャーラに活を入れた「傲！！」

イシュノバの気合は大気を揺るがし、シャーラへと放たれた。勢いでシャーラはノズに倒れこむ。その瞬間、おもわず「きゃあ！」という声をあげた。

ふふん。とイシュノバは満足げにまた腰をすえる。

ノズはシャーラを抱きこむと、ちよつと不機嫌にイシュノバに問う。

「ショック療法か？ 強引なことだな」

「いや、ワシはシャーラに溜まっておつた負の気を払い落としたままで。どうじゃ？ 声がでるようになったらどう？」

見ると、シャーラは喉に手を当て、喉を震わせている。発声しようとしている。ついに心もとないが、「……声、出る」と呟いた。

「声！ 出る！」

まるで鈴が鳴るような、涼やかな声だった。そして喜んでイシュノバに抱きついた。

イシュノバも舌でシャーラの頬を舐め、摺り寄せる。

一人、剣呑としていたノズだったが、ため息をついて、二人に近

づいた。

「全く。人の心配をよそに。まあ、声が無事に出たならば、問題はないか」

イシュノバに頬を寄せていたシャーラだったが、ノズが近づいてくると、その細い腕を伸ばし、ノズの髪の毛に触れた。

「まるで、ファバ神みたい。素敵な髪」

ファバ神とは、地に落ちた火の神の事だった。ノズは今まで何度も言われ忌まわしいと思っていた事だった。だが、彼女は「素敵な髪」と言った。

「素敵。綺麗。あなたはファバ神のお使い？」

ノズは苦笑して、首を振った。

「俺はただの槍使いだ。この髪もただの突然変異さ」

「そんな事ない。ノズはきつとファバ神のお使い。今日の戦いを見て、神様が助けにきてくれたと思ったの」

神様はイシュノバなのだが、彼女にはノズも神に関わっていると思っただろう。

だが、彼女は、禁忌である地に落ちた神々の名を平気で使う。この子はいったい何者なのだろうか。

シャーラは欠伸を噛み締めた。もう夜が遅い。

「細かい事は明日にしようか。俺が寝ずの番をしているから、ゆっくりお眠り」

彼女の頭を撫でた。彼女はイシュノバの傍で安心しきったように眠りにつく。

まるで、彼女自身が鈴のような、そんな子だな。とノズは何気に考えた。

「まず、采紗に戻る。シャーラの服も替えなければな。いつまでも

舞子の衣装のままでは旅なんて出来ない。あと、シャーラの故郷に行く。着いて行きたいといっても故郷に帰れば、考えが変わるかもしれない。夜盗に襲われていないかはわからないが」

日が昇っている。ノズは地図を広げながら、イシユノバと語り合っていた。シャーラはまだ眠っていた。緊張した日々で生きてきたのだ。少しくらいの安らぎは必要だろう。

「いや、それよりも気になる事がある」

珍しくイシユノバが異をとねえた。そして自分の内で眠っているシャーラを除き見、まるで親のような表情をした。

「シャーラの事が気になる。この娘はフアバ神の名を禁忌ともしていない。そして、昨夜見た舞。……あれは、秘伝とされる残り二十三の舞の一つ。三十二番の舞だ」

舞によって物語は語られる。と言ったが、残り二十三の舞の意味は伝承されていない。

つまり意味が判かっていないのだ。

「シャーラの故郷に少しでも早く着いて、舞の意味を知る人間に会いたい。だから、采紗には戻らず、すぐさま故郷の場所を聞いて出発したいな」

「彼女の故郷が夜盗に襲われているかもしれないのか？」

「……ワシの勘では、シャーラの故郷はノーアにあるのではないのかと思うのだが」

ノーア、それは女神ヒュマノズが見放した地とされている。地図にさえ載っていない、遠い遠い南の地。確かにそれならば、今だフアバ神を崇めたりと禁忌すらない土地と納得する事が出来る。

「そんな遠いところから来たのか……？」

思わずノズは、すやすやと寝息の立てているシャーラをみた。

「ワシの、勝手な想像じゃがな」

そう言って、イシユノバはふん、と息を漏らした。すると、その呼吸が胸を大きく膨らませる事となってしまつて、シャーラがかくん、とずれた。

「うつん……」

しまった。という表情をイシュノバがした。息を大きくはいたその振動によってシャーラを目覚めさせてしまった。

まるで、本当の親子のようだな。とノズは苦笑する。

目をごしごし擦って、シャーラは身を起こした。そして、すでに朝も遅い時間だとすぐに気付く。

「ごめんなさい。寝すぎちゃった……」

ノズは少し笑って、シャーラの頭を撫でる。

「いや、まだ寝ててもいいくらいだった。井戸で顔を洗っておいで素直にシャーラは井戸へ向かった。

瓶を使って水を汲む。そして顔を洗い、髪を整える。水浴びもしたいところだが、そんなに此処は 水が豊富というわけではない。底が見えるくらいの浅い水量に、シャーラはがっかりする。

そして戻りぎわに、ノズとイシュノバに語りかける。

「私の里は川が流れているのに、此処は砂と岩だけなのね」

ノズとイシュノバは顔を見合わせた。ということは、やはり、シャーラはノーアの地の子かもしれない。

「シャーラ、おまえは何処から来た？」

地図を見せて、指で現在地を示す。だが、シャーラは首を振るだけだった。どうやら地図自体を見たことが無いらしい。

ただ、彼女が言うには

「もつと草木が元気で一杯なの。それから水が流れていてね、私たちはアーシエ神といろいろな神様にありがとこの舞をするの。此処に来るまで、ずっと山を下った。たぶん、私たちの里はもつともつと上にあるのね」

どうやらイシュノバの意見が当たっているらしい。この岩山を登りきったところで、地図は途切れているのだ。彼女は地図上の外から来た事になる。

鋭い視線をノズとイシュノバは交わした。無言の意見の一致だった。

「では、イシユノバの意見で行こうか。この先に少し小さい集落がある。そこでシャラーラの衣類なりを調達すればいいだろう」「
そういうことになった。

4 旋律を聴け、韻律に舞を

ノズは槍を担ぎ、荷物を持つ。シャーラはイシュノバの背の上に乗っていた。

きやつきやとはしゃぐシャーラ。イシュノバは振り落とさないようにするのに必死だった。

やがて、夕方頃、何事もなく小さな集落に着くことが出来た。

突然の不審な人物たちの登場に驚いた様子の集落の人々だったが、シャーラが巫女で、しかもこの近辺の夜盗をノズたちが潰したとわかると、喜んで招き入れられた。

シャーラは、巫女ということで夜盗に連れ去られ、ろくな扱いをされてなかったと知ると、集落の女性陣が彼女を取り巻き、風呂場へと連れ去っていった。

ノズとは言うのと、武勇談を聞きたいと男性陣に囲まれ、この集落の長の屋敷へ連れて行かれた。それを遠目で若い女の子たちがノズをうっとりとしながら見つめる。

紅い髪ということを気にしなければ、ノズはかなりの美形に位置するのだ。

イシュノバというと、最初、長の家の、庭の樹に紐で繋がれそうになったのだが、それをノズが人に害はないと説明をし、やっと一緒に屋敷の中に入れてもらえることが出来た。

イシュノバがふてくされている。

屋敷の中ではご馳走が振舞われていた。

ノズを中心に集まる人々、それに困惑するノズ。そして、少し離れたところで大人しくしてるイシュノバに、風呂に入れてもらい綺麗に髪を透してもらったシャーラがやってきた。もちろん衣類は着替えて、旅用の服になっている。

「イシュノバ！」

「おお、シャーラか。綺麗になつたな。こつちおいで」

もちろんイシュノバにもご馳走がならんでいた。いつものようにイシュノバの腹あたりに座り込むと、周りを見渡した。

「ノズ、大変そう」

イシュノバが苦笑ともとれる笑い声をだした。もちろん他の人には聞こえないように。

こつそり聞き耳を立てていると、ノズは夜盗をやつつけた時の事やら、何処からきたのとか色々聞かれている。それを何気に彼は話を逸らす。

「ノズつて、あまり、自分の事しゃべらないのね」

「そうじゃな……」

なにやら含みのある言い方をした。そして、シャーラに故郷の話聞く。

「私の里では、口伝が語り継がれていてね……」。

…神界の獣の神、火の精霊、雷の精霊、風の精霊、水の精霊を操る。それを恐れた人の神、獣の神を地に落とす。獣の神四つの精霊を無くす。それはかの神々から授かったもの。獣の神、四つの精霊を探す。これ定め…

この話の後は私はまだ教えてもらってないの。だから最初見たとき、ノズが火の精霊かなって思ったのよ」

初めて聞く口伝だった。イシュノバも驚いた。獣、言わばそれはヒュマノズ神側についていた神が、アーシエ神側の神の精霊をつれていたということか。

ただ、妙に納得した。ノズの事だ。

「……彼は本当に精霊の化身かもしれない。…シャーラ、この話は本人に知られてはいけない話だが、内緒にしておれるか？」

シャーラは頷いた。真剣な顔をしている。

イシュノバは遠い目をした。そう、あれは初めてノズと出会った

話。

「そうさな。何年前になるかの……」

イシュノバは北の大地を歩いていた。

その地は、雪や氷に覆われた、無人の世界。イシュノバは何故この地を歩いているのか判っていないかった。ただ、歩いていた。

私は何者か、それすらもわかっていなかった。

空腹が歩く力を失わせる。雪の中を歩くのは非常に体力がいる。

イシュノバはちょうど渓谷の脇を歩いていた。雪が溶けて小さな川を作っていた。

そこに、紅いモノを見つけた。近づいてみると、どうやら人間の子供らしい。真っ白な世界に違和感のある紅い色。それは嫌でも目に留まってしまふ。

その少年は呼吸をしていなかった。

渓谷の水を最後に飲もうとしていたのであろう、這った後が、そこにはあつた。

もう、長くはないな。

少年の、気が段々と薄くなつていく。気とは生命力だ。今まさに、少年は死に絶えようとしていた。

その気をただ、イシュノバは眺めていた。消えてしまつたら、いつそのこと、我が腹に入れてしまおうとすら考えた。

ところがである。

もう、消える。そう思った瞬間、その時になって、大地が震えだしたのだ。

「韻律が聴こえる……」

目を閉じ、そのリズムに聴き入った。それは大地が、水が、空気

が、それを奏でていた。

そのリズムは一種の気となり、少年の中に吸い込まれていった。なにが起きたというのだろうか？

よく見てみると、さっきまで死にかけていた少年が、微かながら呼吸を始めている。

「死なせるな。ということか」

大地が彼を死地から救い出した。こんな出来事をみるのは初めてだった。

イシュノバは、少年の襟首を銜え、近くの洞穴に入ってしまった。

「それって、ノズは一度死んだってことになるの？」

イシュノバは首を振った。

「それが、わからんのじゃ。一度確かにノズの気は消えた。だが、旋律が流れ込み、彼は目を覚ました。それがワシの旋律かどうかも、わからんのじゃ」

「もし、それがイシュノバの韻律なら、ノズは消えちゃうの？」

泣きそうな顔でシャーラはイシュノバにしがみついた。イシュノバは首を振るだけだった。

わからない。何も。

「だが、もしかしたら、その精霊の力かもしらん。それがノズを助けた」

首を伸ばしてノズを遠くから見た。あの紅い髪のせいで、彼は故郷を追われ、あの北の地の果てで力尽きていた。

そしてイシュノバと出会う。

イシュノバは、彼に言ったのだ。

「ならばワシと来るがよい。ワシの記憶を戻す旅をするのだ。それが今のおまえの生きる糧となる」

ある意味、呪いの言葉だったのかもしれない。その言葉に絡めとられ、今の彼がいる。

だが、それが無かったら？

彼は再び、死に向かっていった

いただける。

「この地にはな、おぬしの住んでいたノーアの地の他にも、人間が踏み込めない領域がある。氷に閉ざされた地。炎が大地から噴出している地。常に雨雲に覆われて雷が暴れている土地がな」

不思議そうに、シャーラは首をかしげる。

「それ、もしかして精霊が我を失っているのじゃないかな？」

なるほど、そこに行けば精霊がいるのかもしれない。だが、それを取り込む方法はわからない。

「シャーラ、ぬしはどうやって夜盗に連れ去られたのじゃ？」

シャーラはぶるつと体を震わせた。連れ去られたときの恐怖を思い出したらしい。

辛いことを聞いたな、とイシユノバは後悔する。

「ぬしが辛いなら、聞かぬが」

彼女は首を振った。

「私は、里の外に出ていたの。不思議な植物があつて、それと会話していた。すると、その木が、「お逃げ」と叫んだわ。でも私は後ろに夜盗がいたとは気づかずに、どうしてと聞いてしまったの。…

…そうするうちに、私は連れ去られてしまった。里がどうなったか、私はわからないわ。その木は里からかなり距離があつたし、里は見えないように隠されていたから」

そうか、と言ってイシユノバはシャーラに擦り寄る。怖いことを思い出させてしまった。

…ならば、里は襲われていない可能性もあるかもしれない。

とにかく、その里とやらに行ってみる必要があるな。

深夜になって、ようやくノズは解放された。そして、客室に案内される。

客室には、すでにシャーラとイシユノバが居た。疲れた様子 of ノズにシャーラは近づく。

「大丈夫？ ノズ？」

「ああ、シャーラ、綺麗になつたじゃないか。見違えたな。……本
当に、こつこつというのは、戦うよりも疲れる」

そう言うなり、ベッドの上に倒れこんでしまった。別に酒に酔っ
ているわけではない。あえて言うなら人に酔つたのだろう。

ノズは街よりも荒れ果てた大地のほうが生き生きしている。シャ
ーラはそう思いながらノズに布団を掛けてあげた。

珍しくその日、ノズは眠り込んでしまった。

シャーラはイシュノバの話が頭に離れなかった。一度消え
かかった生命の気。それを復活させた自然の旋律。

むくりと自分のベットから起きて、ノズのベットに近づいた。こ
うやって見ていると、生きているのか、死んでいるのかわからない。
よいしょ、とシャーラはノズの布団に潜り込んだ。

暖かい。そしてどくんどくと脈うつ鼓動。

良かった。ノズは生きている。

ノズはきつと精霊なのね。と自分自身に納得させて、そのままノ
ズの布団で眠りについてしまった。

深夜、ふとノズが目を覚ますと、自分の布団の中にシャーラが居
た。驚いて、飛びのこつとしたが、イシュノバが制した。

「静かに眠らせてやれ」

暗闇でイシュノバの目が光っている。彼は一部始終見ていたのだ。
「人恋しくもなるさ。そんな幼子だ。それともなんだ？ 主はそん
な子を放りだす、無常な男か？」

大人しくノズは布団に戻る。

「シャーラは主のことを、精霊と誤っているようだぞ」

イシュノバは面白そうに言った。自分を大切にしないノズ。それ
をイシュノバは知っている。

「ふん、俺はただの人間だよ。存在していても、しなくても変わら
ない塵だ」

そう毎回言う。

自分を必要とされたことのない青年は、排他的な言葉を使う。しかたがないのかもしれない。

彼は集落から捨てられた身。落とされた神が呪いをかけに復活したというデマによって、捨てられたのだ。

ノズの故郷あたりは特に信仰心が強い場所だった。それゆえに、異端児は激しい偏見を持たれる。……たとえば、血を分けた兄弟といえど。

あれから一度も故郷に戻ってはいないが、旋律を見つげるためなら一度は足を踏み入れなければならぬ。

シャーラが転がり落ちそうになったので、急いで抑えた。

人の体温とは、こんなに暖かいものなのか。

そう思って、ノズは再び眠りにはいる。

朝、シャーラはノズの腕の中で目が覚めた。

一人用の小さな木のベットは、ノズだけでも一杯なのに、シャーラはその中に潜り込んだのだ。

思わず眠ってしまったのだが、ノズは落ちないように、しっかりとシャーラを抱えていた。

「……目が覚めたか」

ノズは寝ていたとは思えない、冴えた声でシャーラに聞いた。

とたんに、シャーラは真っ赤になる。

「ごめんなさい。眠っているノズが……」

死んでるように見えたの。なんて喉が裂けても言えない。

「……めずらしくて」

とつてつけたような理由だったが、それでもノズは納得したようだ。

少し笑いながら抱えていた腕を放した。

「俺もちゃんと眠るよ」

ノズは身体を起こして伸びをした。一緒にシャーラはベットから降りた。

イシュノバは何も知らん顔をして欠伸をかみ締めている。珍しく、平和な朝だった。

5 旋律を聴け、韻律に舞を

長に礼を言い、人々に感謝の意を表しながら、三人は集落を出た。「イシュノバ、旋律は良かったのか？」

少し離れたところで、ノズが聞いた。イシュノバは首を振るだけだった。

「あそこからは、私の気は感じなかった」

イシュノバの記憶が少しずつ戻るたびに、能力がひとつ呼び戻される。「乱」の韻律を取り戻したときに、自分の気というものがかかるようになった。

「何処」かなどの確にはわからないが、地に流れる気配は察知できるところになったらしい。

「昔に比べれば大分能力も戻ったほうじゃ。以前はただの獣同然だったからの」

可笑しそうに、イシュノバが笑う。

確かに昔のイシュノバは人語をしゃべる、ただの獣のようだった。それから、ぽつり、ぽつりと「記憶」を取り戻して、不思議な能力を発揮するようになった。

例えば、人外の気配を察知できるようになったり、以前シャーラにやったように、負の気を吹き飛ばすこともできるようにもなり、未だその能力は見せていないが、竜巻を起こしたりもできるらしい。獣の神、炎と風と水と雷の力を持つ。そう言われているということ、そんな能力もまだ眠っている可能性があるだろう。

とりあえず、今はシャーラの里に行くのが先決だ。

三人は岩山を登り、地図では表示されない地域までやってきた。さすがに、ノズもこんな地の果てには来たこともなかった。

それは、不可思議な光景だった。

こんな地の果てに、とてつもなく巨大な、そして果てしない岩壁が聳え立っていたのだ。

誰が作ったのか、壁の先端は全く見えない。

これはまるで、この地を守っているような
逆から捉えればこの地から出られないようにしているかのような岩壁。

「シャーラ、おまえの里は、この外か？」

思わず聞いてしまう。こんなところから出ることなど、どうすれば出来るというのか。

しかし、彼女は力強く頷いた。

「そう。私の里はこの壁の向こう」

そう言つとシャーラは、入り口すら見当たらない壁に手を触れた。すると壁はこの世界の異物を吐き出すかのように、ぽっかりと口を開けた。

「私が触れている間に早く！ 中に！」

ノズとイシュノバがすばやく中に入る。そしてそれを確認してから、シャーラは自らもその中に身を翻した。

手を離すと、するりと口は閉じていく。

「……これはこれは。全く変わった呪いだな。此処のものを入れない為か、それとも、向こうのものを出さない為か」

イシュノバはため息をついた。世界はだいぶんオカシクなっているようだ。

そして周りを見渡してみる。そこは、植物が密生した場所だった。空気が濃いような気もする。

「ここは私たちは森と呼んでいるわ」

ここに生えている植物を採取したり、この周りに生存する生き物を取ることで生活は成り立っているらしい。

ざわざわと賑やかな『声』がする。全て植物の声だそうだ。

「おかえり、っていつているの」

「じゃあ、里はどうなったか聞いてみたらどうだ？」

ノズが言う。確かにそのとおりだ。シャーラは近くの大きな木に

相談をもちかけた。

すると、電信のように『声』が広がっていく。

数分もしないうちに、『声』が戻ってきた。

「大丈夫だつて！ この里はアーシエ神に守られているんだよ。悪い奴に入れるわけないもんね」

にっこりと、シャーラは笑った。

シャーラが言っていた不思議な木というのは、アーシエ神の寄りしろか。一度会いに行ったほうがいいだろう。

ともかく、里へとシャーラは連れて行かなければならない。彼女抜きじゃこの世界に迷い込むだけだ。

シャーラは器用に植物の根っこを避けながら進んでいく。ノズはというと、慣れない『森』で苦戦をしているようだ。

イシュノバは何故か慣れた足取りで歩いていく。

なぜワシはこの密生した大地を不安定なく歩けるのだろうか。

ワシは今までこんな『森』というところは来たことがない、はずではないのか。

だが、しかしこの懐かしい匂いはなんだろうか。

意識の端を突つかれる。そんな感じがした。

木の根を超え、葉の密集を分けたとき、突然集落が現れた。

それは大きな集落だった。国の中とは違い、建物は植物の蔭や板によって構成されている。

国では岩や煉瓦を組み立てて色を塗っていくというのが、主な建造物だった。全く異なった生活をしているらしい。

「シャーラ！」

集落の入り口で、彼女の名前を呼ぶ声があった。

振り向けば、シャーラと同じくらい年齢の少女。信じられない。そんな顔をして、突っ立っていた。

「ヨウ！ ただいま。帰ってこれたわ」

そう言っ二人抱き合った。

「どこかへ連れて行かれたって聞いて、心配で、心配で……」

ヨウと呼ばれた少女は涙を浮かべながら喜んでいいる。その声で、村人がわらわらと集まってきた。

「この二人が、私を助けてくれたの」

ノズとイシュノバをシャーラは皆に紹介する。普通、紅い髪はノズは気味が悪いというような表情をされるが、この人たちは違った。

「おお！ ファバ神様の化身だ！」

そう皆は言いあい、ノズに向かって礼をする。

そんな姿を見たことが無かったから、ノズは逆にぎよつとした態度を取ってしまった。

やはりここは、信仰が逆になっているのか。韻律も舞も違うものを見れるかもしれない。

そういうことを、村人の一人に言ってみた。

「ここは、この森の神木を崇めている者たちばかりです。シャーラがその近辺でさらわれたと聞いたので、心配していたのですが……」

シャーラが言っていた、不思議な木のことだろうか。

その場所を聞き、ノズは村の外へと出て行った。そこにはイシュノバが隠れるように座っていた。

「何故、そんな所に？」

「ワシがイシュノバで神と分かれれば、村人は不快な思いをするだろう。念のためだ」

イシュノバの様子がおかしいと感じたのは気のせいだろうか。ノズはいつもと違う雰囲気イシュノバを眺め見た。

「とりあえず、その神木とやりに、挨拶せねばな」

そういつと身体を起こし、ひょいと木の根を飛び越えた。

「いくぞ。ノズ」

足元のおぼつかない場所なのに、イシュノバは軽々と進む。そして、道を知っているかのようにどんとどんと歩み続ける。

「イシュノバ、待ってくれ」

槍を担いではいるのだが、木の枝に引っかかって思うように進めない。こんな世界は知らない。かつて来たこともない。よくまあ、イシュノバは軽々と歩けるものだ。

ノズは気づいていなかった。イシュノバの焦燥感に。そしてこの違和感に。

6 旋律を聴け、韻律に舞を

密生した世界が続いていたが、突然、世界が開けた。大きな湖に、その中央にそびえ立つ大きな樹木。

「これは……」

ノズはなにも言うことができなかった。ただ、眼を見開き、啞然とした。

横でイシュノバはその樹木を見上げた。そして、湖に足をつける。

沈む……。

もちろん、ノズはそう思った。だが、イシュノバの姿は、沈み込むことをせず、その水の上に立っていた。

軽く、波紋が広がる。

神々しい姿に見えた。水の上に立つ、真珠の毛なみを纏った獣の神、イシュノバ。

傲！と声を上げると、ゆっくり、中央の大樹に向かっていった。

「久しいの。アーシエよ」

さわさわ、と、木の葉のざわめく音があちこちから響いた。風だろつか、と思えるほどのささやかな音。

「アーシエよ、今のワシには、ぬしの声を聞き取る力がない。姿を現してくれ。ワシに力を貸してくれ」

ノズは湖の向こう側からその光景を眺め見ている。神秘的な力が見えるかのようだ。

緑色のそれは、森全体から流れてくるようだった。風ではない、気というのだろうか、不思議な力。それがイシュノバの上で集まり、緑色の塊と変化をして、姿を現す。力は中心の大木の前に降り立った。

それは、シャアラよりも幼い少女のような緑色の塊。塊というには意味がある。それは半透明なのだ。後ろの木の幹が薄っすらと透けさせるくらいだった。

全身、緑色ではない。顔の部分はちゃんと肌色には見えるし、手足もすわりと伸びている。だが、人間、というには違いすぎた。

「久しぶりだな、イシュノバよ」

「それ」は口を開いた。大きな瞳に小さい鼻と口。このまま成長させればきつと美しい女性へと変化をするのだろう。

「ワシも力を失つての。こんな姿で申し訳ない。ワシの力はさらに大きく四方に分かれ、個々でひっそりと生活するのが精一杯なのだ」

「ここまで眷属を広げてか」

イシュノバは苦笑しながら、その力の元へ、アーシエへと顔を向ける。

困ったように、アーシエは笑った。

「何を言う。我々はこうせねば生きていけぬ。知っているだろう？

我ら眷属は自らの子孫を残すだけで精一杯ということ。子孫を残すことが我らの唯一の道。これは古代からの道。数百年、数千年前経とうと、変わることがない」

…… 神話と、話が違う。とノズは考えていた。

舞い伝えられる言い伝えは、アーシエ神は己らの勢力を伸ばすために、ヒュマノズ神に戦いを挑んだのではないのか？

世界を緑で覆いつくそうとしたのではなかったのか？

今、聞いている話とは大きく食い違いが生じる。

「ふふ、人間。何が不思議なのだ？ 確かに我らは数百年前にヒュマノズと戦い、敗れた。だから『世界』に立ち入ることを禁じられた。そして力を奪われた。ワシもこんな姿をしているのが精一杯だよ。我らは此处、『世界の断片』に眷属を連れてひっそりとしているのだ」

この緑に覆われた世界がひっそりとしている、と？

ノズは疑問に思ったが、彼らはこう、地に張って生活しているのが、生命を保つ方法だ。とイシュノバが教えてくれた。

「あそこの里は、主と繋がりがあある人間たちか？」

イシュノバはシャーラの里のことを言っているらしい。アーシエは頷くと、慈しむような目をして、空を見上げた。

「そう、彼らは私たちの戦いがある以前から、私を慕ってくれた人間の一族。その生き残りだよ。私が、『あの地』を離れる時も一緒について来てくれた。可愛い子供たちだよ」

「シャーラという少女は知っているか？」

アーシエは頷く。

「あの一族の巫女だな。主が連れ帰ってきてくれた。彼女は両親を失っているが、巫女としての力は素晴らしいものがある。ワシの声も微かながら聞き取れるようだ。ワシの目の前でさらわれて行ったのが、口惜しかったわ」

ワシは動くことができぬからな。と寂しそうな表情を浮かべた。

「だが、イシュノバよ。おぬしなら出来るだろう。ワシの苗木を彼女に渡すということが」

イシュノバは眉をしかめ、意味がわからぬ。といった。そもそも、此処でアーシエ神と会えたのが奇跡のようなものなのだ。

「そう、急くな。しばらくあの里でゆっくりしていくがいい。此処には、『内』にはない舞と韻律に出会えよう。そなたの力も多少、戻ることだろう」

優しい声だった。静かに微笑む。反対にイシュノバは困惑した表情をした。

「無理をするなよ」

そう言つと、アーシエ神の魂は空へと霧散していった。

『内』の人間にとっては最も凶悪な敵であり、もつとも憎むべき敵、それがアーシエ神だった。

その神をこんなに近くで見たのだ。そして、その語り継がれている姿とはそれは恐ろしいものであり、木々を操る悪魔のように言わ

れていた。それが、あんなに幼い姿をし、地に根を張ることで生きていく生命の集合体だったとは。いや、人間の姿は仮の姿だ。本当ならばもつと巨大な生物にもなれたのかもしれない。

だが、この聖地はどういうことだろうか。ノズがいた『内』の世界では土と岩と砂の大地だ。なのに此処は「世界の外れた場所」でありながら、こんなに清く、美しく、緑に溢れ、水に覆われている。何かがおかしい。

ノズはそう思う。

イシュノバも先ほどから何も言葉を発さない。ただ、静かに前を歩いていく。

「イシュノバは、戦争前の世界を覚えているか？」

ぴたりと足を止めた。つられてノズも立ち止まる。イシュノバはノズに振り向き、悲しい顔をしながら、頭を垂れた。

「……いや、覚えておらぬ。何も覚えていない……はずだ。だが、頭の奥で何かが引つかかっている。ワシはどちらの味方だったのだろう。そのことすらわからない。……わからなくなった。と言ったほうが正解かもしれんな。何が正しいのか、正しかったのかわからない……」

イシュノバも混乱しているのだ。

『内』の世界をこんなにも荒れた土地にしたのは、誰なのか。自分分は正しかったのか。誰が正しくて、間違っていたのか。何もわからない。誰が『内』と『外』と切り離してしまったのか。

ただ何か、作物的なものを感じる。それはアーシエからか、ヒュマノズからかはわからない。もしかしたら両方からか？

「全ては、イシュノバの記憶にかけるしかなさそうだな……」
ぼつり、とノズが言った。

7 旋律を聴け、韻律に舞を

集落に戻った二人を待っていたのは、生き生きとしているシャアラに、その集落の人々。

活気もよく、皆いそいそと舞の準備を始めている。

ここは、『内』に比べると質素だが、その代わりに目に映るのは色とりどりの植物や、花や、果実たち。それに応えるように澄んだ青空。

世界はこんなにも色に溢れていたのかと、驚きを隠せない。

イシュノバはなんとなく懐かしいものを見るような目をしているが、ノズにとっては、初めての世界だ。色彩が眩しすぎて、思わず目を細めてしまう。

シャアラは入り口に突っ立っている二人を見つけ、手を引いて、長老のところへ連れて行く。

「長老様、このお二方に助けていただきました。槍使いのノズと、獣の神、イシュノバ」

おお、と長老は声を上げた。どうやら、この人物は世界を見るこ

とができないようだ。つまり、視力が無くなっているらしい。七十代であるう長老は、見事に光り輝いている頭部と、見事な白い豊かな髭を蓄えていた。身体は標準男性と代わりが無い。が、歳には勝てないようだ。しわだらけの足を組み、ゆったりとできる椅子に身体を落ち着けていた。

視力が無くなっているとはいえ、イシュノバの神気を感じたのだろう。よろよろと椅子から身体を下ろし、頭を下げてイシュノバに敬意を表す。

「記憶を失っていらっしやるとお聞きしました。わが一族に伝わる物語の通りなのでございます。新たな道を指し示すのが、我らの定め。アーシエ神との約束でございます。今宵、いや、数日此処に滞在して頂きたく、お願い申し上げます」

イシユノバはため息をひとつ漏らすと、その頭を下げている長老に声をかけた。

「何故、ワシが此処に来ることがわかっておったのだ。誰だ。その物語を語り継いでいるのは。その物語を作ったのは。アーシエか？ワシは、アーシエにもヒユマノズにも従う気はない。お前たちの思い通りに動くのは、ワシの意にそぐわない。……だが、記憶を失っているのも事実。それを不便には思う。一泊だけだ。それ以上は此処と関係を持ちたくない」

そう言うと、イシユノバは後ろを振り返り、歩き出した。もう、此処には用が無い、というかのように。

舞が始まった。

中央で煌びやかな衣装を着て、舞っているのは、シャーラだ。

この間の舞とは違う、また見たことがない物語を語っている。イシユノバは、それを目を細くして見つめている。

「…四十番の舞。アーシエ神が地を離れる物語……」

舞子の舞は、一般の人が踊れるような舞ではない。神に捧げる舞なのだ。なので、その舞自身にも力がある。人々は、物語を読むだけに集まってくるわけではない。舞子の発する神気ともとれる気その身に受け、心身を清めるのだ。ゆえに舞子は選ばれし者しかなく、見ることができない。

ふと、イシユノバの耳がぴんと立った。ノズは静かにその様子を見つめ続ける。

「これは……『静』の音。だが……？」

太鼓の方に視線を向けた。ここでは太鼓は二つで音楽を奏でている。

主な音楽のリズムと共に、影に隠れながらも一つの旋律が流れている。

「裏旋律か…」

ノズが言った。初めて聴くものだった。表の旋律と裏の旋律が、お互いを高め合って、新しいリズムを作る。

何と言っているのだろうか。

表の旋律は、こう言っている。

悲しや、悲しや、地の母アーシエ。自ら生まれた地を離れ、

新しい拠りどころは、かの果てに。

寂しや、寂しや、皆泣いた。そして、地は水で溢れる。

水の子、地の中沈みこむ。

さらに裏の旋律

縛られしこの身を開放せよ。

時は、来たれり、翼を広げよ、空を見よ。

身（実）を持って、根を張れ、わが身をもて。

時は、来たれり、上を見よ、空を飛べ。

二つの旋律が重なる新たなる旋律。

二つの世界、均衡破れる。

それを救うは、正なる神か、闇なる神か。

信じるならば、闇の神

信じぬのならば、正の神。

どちらが正しい。どちらが間違い。

道は開かれた。

道はいくつ。道はどい。

旋律の意味を読み取ると、そのような事を言っている。

イシュノバは目を瞑り、『静』の韻律を身体に取り込んでいる。

またひとつ、記憶が戻るだろう。

そして、取り戻した時にのみに緑色に光る、その瞳をノズの方に向ける。

「舞が終わったあと、シャーラを連れて、アーシエに会いに行かねばならん」

8 旋律を聴け、韻律に舞を

旋律の意味は一体何なのだろうか。ノズには全く分からなかった。ただ、イシュノバはシャーラを乗せアーシエ神が姿を現したあの大樹の元へ向かっている。

ノズは、少しずつ記憶を戻し、ひとつひとつ神へと戻り行くイシュノバが、段々と遠い存在になっていく気がしていた。

……仕方が無い。これは、そういう旅なのだ。

幼い頃、故郷から追放され、雪の大地に倒れていた自分を救ってくれたのは、イシュノバだ。

それ以降、いつも一緒にいた。すでに親以上の存在だ。自分に槍を授けてくれたのも彼だった。

技を教えたのも、心得を教えたのも。

彼が全ての記憶を取り戻した時、ノズはどうすればいいのだろうか。

世界が変わるとでもいうのか？

ただ、神の一人が記憶を取り戻す。というそれだけなのだろうか。

ノズは無意識に感じていた。これは、イシュノバの記憶を取り戻すだけの旅では無いと。

いわば、鍵のついた世界から、鍵を外す、そういうことではないのか？

ノズは無言で、イシュノバの後ろを歩いていく。

イシュノバは沈まない湖の中心で、背中にシャーラを乗せたまま、再び吼えた。

昼間と同じ現象が起こる。緑のものがあちこちから浮遊し、集合、結合して、あのアーシエ神が舞い降りてきた。手には何か実を持つ

ている。

シャーラは目を大きく見開きながら、その光景を見ていた。

「あれが、主としゃべっていた相手じゃよ」

「あれが……アーシエの神様……」

きらきらした表情がシャーラの顔に浮かんだ。獣の神イシュノバだけでなく、この世界の二大女神の一人、アーシエ神を見ることができたのだから。

「アーシエの力の一部だ。彼女の力は四方に散ってしまった。再び大きな力を得るには、この緑の実を身に宿して力を探すしかない」

「イシュノバ……！！ その実は……！！」

ノズが言葉の意味を察した。湖の端で叫んでいる。

「……シャーラ、私の可愛い子。貴女にお願いがあるのです。この実は私の力そのもの。この実を身に宿し、イシュノバと共に旅をしてもらいたい。……私はこの地を離れることはできないのです。地に根を張るのが、わが身を生かせる唯一の道。けれど、貴女に身を宿せれば、力の欠片として、共に歩むことができるのです……」

シャーラは実を見つめたまま、呆けたように固まっていた。

実を身に宿す……。その言葉はなんて恐ろしく魅力的な言葉だろうか。

「シャーラ！ 駄目だ！ 実を身に宿すなんて……！！ おまえまで追放された神の礎になるんじゃない……！！」

そう、『実に身を宿す』言葉の通り、アーシエの力をシャーラの身に宿らせ、身体をアーシエに与えるという事。どうなってしまうかは分からない。身体の全てを明け渡し、意識をも乗っ取られるのか。もしくは身体の一部に宿らせている『証』を記すだけで済むのか。醜い姿になってしまふのか……。

シャーラは、じつとアーシエの姿を見つめ続けた。それに応えるアーシエ神。力の塊とは言いが、それは意思だ。

神の意思に、人間はどうするのだろうか。拒否することはできるのか。それとも意のままに操られ、加護されるだけの存在か。

ここで、ゆつくりとシャーラは頷いた。ノズは愕然とする。だが、シャーラはノズに向かって振り向き、笑顔をみせた。

「違うよ。アーシエ神には恩義と感謝とがあるけれど、違うの。巫女とか、そんなのじゃなくってね。私はノズと、イシユノバと行きたいの。一緒に世界とは何か、何のためにあるのか、神々とは何か、それを一緒に探していきたいの。……もしかしたら、私の意識は残っていないことになるかもしれない。でも、私の身体がひとつの力になれば十分なの。ノズたちの力になれるだけで、幸せなの」

そう言つと、シャーラはノズの顔を見る事無く、アーシエが抱いていた実を貰い受けた。

9 旋律を聴け、韻律に舞を

そのとき、アーシエの姿は消えていた。イシュノバもその場を離れ、ノズの元に降り立った。

シャーラがイシュノバの背から降り、大切に抱え込んでいた実を、ぎゅっと握り締めた。

最初は、実の汁が零れたと思った。だがそれは緑の光の粒であって、汁ではない。その握り締めて割れた処から段々と強い光が放たれていく。

強い、緑の光だった。

緑の光はシャーラの手から自由になると、自らの浮力で浮き上がり、さらに強く輝きだした。その緑の光だけではなかった。その近辺にある、植物という植物から光が放たれ、その緑に呼応するかのように輝く。

まさに植物の根源の光。

その光は弾けるように世界を白くした。ノズたちの目が耐えられなくなったのだ。

光は弾けたと思った瞬間、シャーラに吸い込まれていった。皮膚から、髪から、ありとあらゆるところからシャーラに入り込んでいった。

「シャーラ！……！」

苦しそうにのた打ち回るシャーラがいる。全身を光に覆われ、光を拒絶するかのように、または見方によれば、その光を受け止める

ために今シャーラは苦しんでいる。

「実を離すんだ！」

ノズはシャーラを抱きしめる。実はいまやただの丸い物体だった。それを取り上げ、湖に放り込んだが、意味は全く無いようだ。

「イシュノバ！　こんな、こんな方法でいいのか？　シャーラを巻き込んでそれで記憶を取り戻して！」

イシュノバは無表情だった。そして躊躇いがちにぼそりと呟いた。「……なあ、ノズよ。ワシが記憶を取り戻したら、どうなるのかの？　ワシがアーシエ側の神だったら、お主、どうする？」

改めて言われ、はつとなった。
イシュノバは獣の神であり、神界に帰るべき存在であり……そして、自分の親のような存在……。

記憶を戻せば、神界に帰るものとばかり思っていた。自分を置いて、いるべき場所へと帰るものだと。

それが、アーシエ側の神だとすると？　伝説は語り継がれている。勝利した神は神界へ。敗者は地を這いずるものになる。と。

まさに、今のイシュノバではないか！

「ワシは、真実を知りたくなつたのだよ。伝説でもなく、語り継がれているものでもなく、真実を。『記憶を取り戻す』ということは、ワシにはアーシエ側からも、ヒュマノズ側からも、何か、試されているような気になつてしかたがない。他の地に堕ちた神々は、こうしてアーシエのように四方に粉々にされておる。だが、ワシは、此処にすることができ。存在することを許されておる。ワシは何かの鍵ではないか……とな」

ノズはシャーラを抱きながら、イシュノバの言うことを聞き入っていた。信じられない話だった。イシュノバが鍵……？　一体何の？　イシュノバは何を思い出したというのだろうか。

ノズ自身は勝利した神や、地に堕ちた神など、どうでも良かった。

むしろ、信仰など捨ててしまいたいくらいだった。ただ、髪が紅いというだけで、集落を追われた自分。イシュノバの言葉が自分の全てだった。

そのイシュノバの言葉……。そしてシャーラの決心。シャーラは今ノズの腕の中で、自身を発光させたり、消えたりしている。容姿に変貌は見られない。ただ、髪が光ったままだったが。

唾を飲み込んで、ノズは言った。

「俺の親は、あんただ。世界を敵にまわそうが、神々の怒りを買おうが、俺はイシュノバの傍にいる。ただ、シャーラは部外者だったはずだろう？ それなのに、何故巻き込むのが、分からない。答ええてくれ、イシュノバ」

イシュノバは瞳を伏せて、何かを考えていたが、顔を上げるとノズにしつかりと眼を合わせた。

「シャーラは、アーシエ神の巫女。アーシエの意思。巫女が神の言葉を否定することはあつてはならない。シャーラはそれを、知っていた。シャーラもまた、アーシエと言葉を交わして約束をしていたのだよ。いざという時は、この身を捧げると」

神と人間の約束は破られてはならない。それがこの世界の盟約。

段々と、シャーラを包んでいた光が弱くなってきた。この小さな身体に何を取り込んだのだろうか。もしかしたら、魔物の姿ぐらいになるのかも知れない。そう思っていたノズは少し安心をする。だが、光は最後まで髪に留まり続けた。

「あ……」

シャーラが気が付いた。目をぱちぱちさせ、身体の節々を確認するように触れていく。まだ光の名残があるようで、彼女が動かした手足のあとには、光の筋が残っている。

「シャーラ、か？」

中、に居るのは誰か、確認したかった。名前を呼ばれ振り向いた彼女は一瞬、強くノズを睨んだ。

「ふむ、お主がノズ、か」

そう言つと、またふらふらと倒れかかる。それをノズが受け止める。今の声はアーシエ神の声だった。やはり、乗っ取られてしまつたのか？

軽く頬を叩いてみた。すると、再び目を開き、出た言葉は、「ノズ、ただいま」というシャーラの声だった。

シャーラは変化、した。黒目がちの瞳は緑の光に変わった。そして、二つの人格を持つことになってしまった。シャーラと、植物の神アーシエ。

アーシエ神が、再びこの世界に戻ってきた - 。

10 舞の為の旋律か ただ、伝えるだけの韻律か

暑い…。

この暑さは何だと言っのか……。

『外』の世界から一旦抜け出し、ノズ、イシュノバ、シャーラ（内にアーシエ）は再び『世界』に戻ってきた。理由は色々ある。言い伝えである「獣の神に従う四つの精霊」を探す旅をしているのだ。彼らの現在位置は、東部の中心部よりさらに外れた、かつて集落があつたと言われている遺跡を探しているのだ。遺跡といえど、太鼓すらあれば、紡ぎ手ノズに、巫女のシャーラが居る。その地に眠っている韻律を引き出すことが出来る。

「イシュノバ……感じるのか？」

隣にいるイシュノバに声をかける。彼は時折耳を澄ますような仕草をしている。そして方向を指示するのだ。

「うむ。微かながらに感じるわ。わが韻律を」

シャーラはイシュノバの背に乗って大人しくしている。アーシエはなるべく無駄な力を使いたくないとみえて、あの時以来、表に出てくることは無い。だが、確実にシャーラは、以前のような純粋な彼女ではなくなっていた。

以前はただの少女だったものが、何かを隠し、憂いをもった女性へと変わっていた。

そんなシャーラを見たくなくて、ノズは前へ、前へと進もうとする。

早く、そんな神など捨ててしまえ。さっさと四方に分かれた力を取り戻して、普通の少女に戻してやりたい。ノズはそんなことすら考えるのだ。

砂の大地に照りつける太陽。風は全く吹く様子も無く、じとりと

した汗が不快感を与える。

何故、こんな東の大地で、遺跡にまでなった集落があるのか。

説はいくつかあった。

まず、盗賊に滅ぼされたという説。これが一般的な言い伝えとされる。

他には、この気候に耐え切れず、村人が逃げ出したといわれたり、神の怒りに触れた。という説もあつたり……。と真実は闇に隠れてしまった。

「ふん、ここか……。かなり巨大な遺跡だな」

遺跡の端に足をかけ、ノズが言った。

不思議な光景だった。

今まで見てきた集落や街などは、四角く整備された街がほとんどだった。中央に演舞台があり、そこから東西へ、もしくは南北へ。大きな街になると、演舞台を中心に、四方へと延びる道が連なっているのが普通だった。

だが、ここは演舞台を中心に、円形状に街並みが広がっていた形跡があるのだ。不思議なことに全体的にすり鉢状にくぼんでいた。

「これは……」

イシュノバがその遺跡を見たとき不思議な違和感があつた。そして、その背に乗っているシャーラが声をあげた。

「これは、八百年以上昔の神殿跡だな。どの神を祭っていたのかはわからんが、演舞台が何処よりも低い位置にあるということは、地に関わる神が居たのかもしれない」

その声はアーシエだった。アーシエが居ることによって知識は格段に増えたのだが、どうしてもノズはアーシエが好きになれなかつた。……シャーラのことが多大に関係しているのは確かだが。

ともかく四人は（アーシエ含む）演舞台の近くに行こうということになった。

遺跡といえど、柱や壁の跡なども存在しており、昔から石造りの建築物だったことを物語る。そして、演舞台に全員がたどり着いた時だった。

イシユノバが威嚇の声を上げた。

この暑さで気づかなかつたが、微かながら風があり、イシユノバたちはその風上にいたらしい。遺跡の影から盗賊が現れたのだ。

「童、退けてみる」

アーシエの冷やかすような声にムキになり、ノズは反射的に槍を掴み、攻撃態勢に入った。

「イシユノバ、シャーラを頼む」

この遺跡は道になるようなところがあまり広くない。槍のノズは不利になる。だが、そんな事を気にするまでも無く、ノズは見事な武術を見せた。

「莫迦者！演舞台を穢すな！！」

アーシエの声が、再び響いた。どうやら少し離れたところに退避しているようだ。

アーシエの声に舌打ちをしながら、ノズは演舞台から離れようとする。どうやら盗賊はノズたちと同様に太鼓を狙っているらしい。さらにはシャーラも目的の一つでもあるらしい。

違う道からシャーラを狙う奴らが出て来た。ノズは遺跡の壁を使い、槍をバネのようにしならせ、飛び上がった。

盗賊が上を見上げると、そこには槍を円周上に回転させたノズがいた。そして、槍の勢いを保ったまま盗賊達に叩きつける。

「おまえら、普通の盗賊ではないな……」

盗賊の行動が見事に統率されていて、まるで軍隊のようだ。だがノズも負けてはいない。一人で三十ほどいた盗賊の大半を仕留めていた。

この感覚、どこかで覚えがある。相手は何者だろうか。考えていると雑魚とは違う相手がノズと鏢迫り合いになった。槍と剣のぶつかり合いになる。槍には金属の装飾があるとはいえ、剣相手では分

が悪い。向こうがさらに力を入れようとした瞬間に、逆にその力を流し、その流した力を利用したまま、槍を回転させ、相手のこめかみに叩きつけた。

「そいつ、殺すな！」

アーシエの声が聞こえた。その直後にイシュノバの吼え声。

声は空気を振動させ、雷が発生し、他の盗賊どもを倒した。

「……ふむ。最初はこんなものか」

今までになかった能力。イシュノバは順調に記憶を取り戻しつつある。

ノズはその力に驚いたが、今はこの捕まえた盗賊を逃がさないようにするのが先決だ。

11 舞の為の旋律か ただ、伝えるだけの韻律か

「なぜシャーラを狙う？」

もちろん相手は素直に答える訳がないというのは判っていた。持っていた縄でその盗賊を縛りつけ、ノズたちは建築物の一部に集まっていた。

鋭い眼をしたその男は無言を貫いていた。外見的には何も変わつたものは特に無い。埃まみれの衣類に盗賊特有の武器。

「お主、『外』の住人だつた者だな？」

言つたのは、アーシエだつた。皆アーシエの顔を見る。シャーラの筈のその顔は彼女がするはずもないキツイ表情になっていた。

「『内』の住人は『外』に出る手段を持たない。ノズがいい例だ。

あの壁に阻まれ、世界の『外』には出れないのだ。なのに、お前ら盗賊は『外』に居たシャーラを連れ去つた。それは『外』の住人にしか出来ない芸当。お前らの目的は何だ？」

「外』の住人はどれくらいいるのだろうか、それがノズは気になつたりした。

盗賊の男は鋭い眼のまま、シャーラをにらみ続けていた。まるで、とつて喰らいつきそうな程の激しいものだった。口を開くはずがない……と思つていたその男は、悪意そのまま、声を上げた。

「我らの目的のため、アーシエ神には大人しくしてもらわなくてはいけない。この世界から追放しかできぬのならば、永遠と眠らす予定だったのだ。それが……。この二人のせいで、アーシエが目覚めた。地を這う者はそのまま這っておれば良かったものを……力をつけおつて……！」

そう悔しそうにノズや、イシユノバを見上げる。

「『我ら』というのは、人間だけを意味するのではないな？ お主らの後ろにいるのはどの神だ？ ヒュマノズか？」

アーシエは挑発するように、その男に詰め寄る。それはもはや十

二歳の子供が見せる表情ではない。その表情に憤った男はアーシエに食ってかかりそうになったが、ノズがそれを抑えた。

そして、息を切らし、睨みつける。

「我らの崇めし者は、お前らのように莫迦ではない。我らが神はすぐ後ろにいる。何も分からずにこの地で野垂れ死ぬがいい！」

そう言うつと盗賊はぐふつとむせたかと思つと、倒れこんだ。ノズが急いで脈を調べてみたが、すでに止まっていた。

「何が起こつた……？」

ノズはもちろんこの男を殺すつもりは無かつたし、周りの皆も手も足も声も出していない。何が起こつたのだろうか。

イシュノバが何か臭いを探る。

「腐臭がする……」

その腐臭は風に乗ってするりと消えていったとイシュノバは言った。

「なんだというのだ？ 腐臭を身に纏いし者がこいつの魂を掠め取つたとも言いたいのか？ イシュノバ？」

アーシエが彼に問うとイシュノバは首を振つた。そして答えた。

「我らには、人間の魂を掠め取るなど、……そんな力を持ち合わせしておらぬよ。我ら神と名乗る事ができるものは、魂を自由に奪い取る権利はないはずだ……」

だが、今の現象はなんだつたというのだろう。この男もまた、自分の命が消えるのを承知していたような物言いだつた。アーシエ神は納得がいかないという表情をしている。

「ただ、わかつたのは、奴らはアーシエやイシュノバの存在が邪魔という事か」

面白い、アーシエは言った。イシュノバは無言を貫く。ノズは立ち上がり、空を見上げた。

空は相変わらず乾いた青空が広がっている。雨など降る気配など、微塵も感じられない。なのに、なんだというのか。この不安を煽る感覚は。まるで嵐が近づいているかのようだ。

この世界を眺め見ているであろうヒュマノズ神。あの神ならばなんといいのか。これはヒュマノズの手のものか、その他の神か、または第三者か。

何者かが、この世界を狙っている。そんな感じがする。

ノズは、槍を突き立てた。せめて、身体を小さくして細々と生きているものたちだけでも救いたい。そんな心持にさせられる。

12 舞の為の旋律か ただ、伝えるだけの韻律か

遺跡での戦いの後、シャーラが演舞台を探索すると、岩でできた棚の中から太鼓が出て来た。

「間違いない。ここの大鼓だろう」

イシュノバは頷き、ノズに叩いてもらうように言った。素直にノズは了承すると、軽く叩いてみた。

遺跡の中で見つけた八百年前の楽器とは思えないほどの音が遺跡中に響き渡る。さらに、此処は乾燥しているうえに、窪地の中だ。反響が素晴らしい。なるほど。この為にあえて低い土地に演舞台を作ったのだろう。

ノズはその場に座り込み、太鼓自らが紡ぎ寄せる旋律を、身を任せて奏でてみる。それに反応するように、シャーラが舞い始めた。

「流水の音が…」

イシュノバが目を瞑る。旋律に合わせてノズも目を閉じる。頭の奥からイメージが湧き出す。そう、まるで水が流れている心地よさ。遺跡中にまるで水が溜まっていくようなヴィジョンが浮かぶ。

こここの神は水の神か……。だが、それも堕ちた神。今は此処には居ないようだ。

目を閉じた奥に写りだすヴィジョンは、この演舞台の裏側あたりから水が溢れ出し、遺跡中に水を巡らせていく。さらには溢れ出した水は、こここの遺跡から飛び出し、今は枯れて、破損されている水路から世界中の地に水の恵みを与えていく。

此処は世界の水源だったのだ。こここの地下から溢れた水は演舞台を持ち上げ、その上で舞子や水の神が舞を踊っていたらしい。なんて神秘的な情景だったのだろうか。今は枯れ果てて見る影もないが……。

やがて、演奏は終わっていく。最後の音を弾いた時、水色の影が現れた。

「……イシユ……ノ……バ……」

擦れがすれ聴こえる声は、誰のものでもない、水の神の残骸の声だった。水の神、アウラ神。その欠片が、此処に残っていたようだ。「……われ……の……せいれ……い……を……さ……がせ……」
それだけ言って、消えた。

太鼓の音で我を忘れていたノズは、その声で意識を戻した。太鼓を地面に置き、今の声の発生源を探す。

「やめておけ。ただの残骸の声だ。旋律の中に微かに残っていただけだろう」

遠い目をしながらイシユノバは言った。頭の中で、シャーラが言った言葉を反すうしていた。

…神界の獣の神、火の精霊、雷の精霊、風の精霊、水の精霊を操る。

それを恐れた人の神、獣の神を地に落としめる。獣の神四つの精霊を無くす。それはかの神々から授かったもの。獣の神、四つの精霊を探す。これ定め…

つまりは、そういうことだ。イシユノバは火の精霊、雷の精霊、風の精霊、…そして水の精霊を探さないといけないという意味だ。取り戻してどうなる？ 地に堕ちた神々を救う旅もしなければいけないということなのか…？

自分の記憶を取り戻す為だけだったはずなのに、なにか、大事な事に巻き込まれている…？

ここで、話は転換される。

ノズとイシュノバだが、孤独に一人で旅をしていたという訳ではない。

世界の中心の都市
蘭麗ランレイの街に、二人の事情を知りながら、
支援している人物がいる。

名をシュウエイといい、齢七十四。この世界では、割と長寿といわれる。紅い髪のノズを孫のように思い、イシュノバを神扱いとはせず、まるで自分の友人のような存在としている。老人だからといって莫迦にはいけない。元は格闘技の達人で、ノズに槍を教えたのも彼だ。

彼とノズらの出会いは、全くの偶然のものだった。シュウエイが修行と行って毎年行つた山修行の別荘で、幼いノズとイシュノバに出会ったのだ。最初は驚いていた彼も、イシュノバから事情を聞くと、なるほどと納得をして、二人を快く招き入れた。そこからの出会いなので、もう十年以上の付き合いになる。

今回、ノズとイシュノバが帰ってくるということは、この世界の各地に住むナナキトリという鳥から教えてもらった。この鳥は、人間の口真似をするのが得意で、皆この鳥を馴らして飼い、手紙の代わりに、飛んで話をしにいらつたらう。伝書鳩のようなものだと思つてもらつても良い。

その鳥が、ノズからやつてきたのだ。

だから、ノズ、イシュノバの他に、シャアラと一緒にたどり着いたときでも、全く躊躇うということはない。いつものように歓迎

をしてくれた。

シャアラが辺りを見回す。もう、此処は集落とは言わない。見事な都市だった。広大な盤の目状に広がっている街並み。中心の広く、大理石でできた美しい演舞台。それを中心に大通りが広がり、右京、左京と分かれている。遠く先は見えないほどの距離だ。そして、その中心奥にこの世界の皇がおり、王権制度で世界は動いている。ただ、その皇でさえも跪くのが、さらに奥にある神殿に祭られているヒュマノズの女神だった。皇はヒュマノズと会話を許されていると聞く。彼女に神託をもらい、そして皇が指示を出すというシステムが、この世界の決められ事だった。

だが、その煌びやかな都市にも、やはり廃れているところもあり、主に貧困層が住み着くのは左京の端だった。『女神が目を背く場所』といわれているこの区域にシュウエイは住んでいた。

別にシュウエイは貧困に苦しんでいる訳ではない。いい歳まで武道家として名を知らしめてきた彼は沢山の弟子がいて、立派な家に鍛錬場もあった。だが、六十歳に世界中を旅してからは、思想が変わったのか、この、『女神が目を背く場所』に居を構え、その周囲にいる貧困に苦しむ子供達にご飯を与え、武術を教えることを生活の楽しみにしていた。

なので、彼を慕うものたちは、身分の差もなく、存在するのである。

「ノズ、立派になつたなあ」

日に焼けた顔に皺だらけの笑顔を作りながら、シュウエイは歓迎する。ノズもシュウエイを師として慕っている。頭を下げ、親愛の礼をする。

ノズたち一行はこの都市をぐるりと見渡せる山の上にいた。シュウエイの別宅である。

シンプルな竹で出来た家だ。その中央に机が置かれており、シュウエイとノズが椅子に腰掛け、イシュノバは横に座る。アーシエは

再びシャーラの中に潜り込んで眠っているようだ。シャーラがちよこんと、ノズの隣に座っている。

「師もおかわり無いようで、安心しました。街のほうはどうですか？」

「うむ。ほとんど変化は無いように見えるが…、貧困の者たちは増える一方じゃな。政のほうも、その解決策を見出せないでいるようだ」

「やはり、干ばつですか…？」

「そのようだ。この世界は乾ききっているようだ。特に西部の端が酷いらしい。砂漠地帯に絶え間なく吹き続ける風が、世界を砂で埋めようとしているという話だよ」

西部の端と聞いて、ノズがぴくりと反応した。

細い目のシュウエイがそれを見逃さなかったわけではないが、あえて黙っていた。西部の端、驟雨炭シュウタンの集落が、ノズの生まれ故郷だったからだ。

「さて、イシュノバよ。この少女がシャーラというのかな？　アイシエ神を身に宿しているとか」

シュウエイの柔和な笑顔が、シャーラに向けられた。シャーラはびくりとして背筋を伸ばす。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。ワシはそこら辺にいる老いぼれ爺だよ。それともアイシエ神として、跪いて挨拶をしたほうがいいのかな？」

シャーラはぶんぶん顔と顔を振ると、自分の手を握り締めてシュウエイを見た。

「私はただの巫女です。アイシエの神様は今私の中で眠っているみたいで…。それに、アイシエの神様は、そんな仰々しい挨拶は嫌みたい……」

そうかそうか、とシュウエイはシャーラの頭を撫でた。武芸で鍛えられた手は、決して柔らかくはないが、なんともいえない暖かさを持っていた。

まるで、ノズの手みたい。撫でられているとき、シャーラはそう思った。不器用で、無口で無愛想。だけど誰よりも深い愛情を持っているノズのようなと。

そうやって、そりりのシュウエイの顔を見ていると、向こうも気づいたようで、皺だらけの顔を、さらにくちやりとさせた。そして、手を離すと、シャーラに言い聞かせるように顔を向けた。

「では、ワシとイシュノバとノズは昔話を少しするから。外でナナキドリの世話をしてくれるかな？」

その口調はお願いというよりも強制力があつた。シャーラは頷くと、椅子から降りる。そして、その足で外に出て行く。

「ワシみたいな爺に世話されるより、おぬしの方がナナキドリも喜ぶだろうて」

にこにこしながらシャーラを見送ったシュウエイは、ノズの方に振り向くと、難しい表情をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3391t/>

旋律を聴け、韻律に舞を

2011年10月9日01時06分発行